

全体概要

東京消防庁管内では平成30年中、日常生活における事故により約14万4千人が救急搬送されています。全体の傾向としては乳幼児と高齢者の救急搬送が多くなっています。乳幼児は危険回避能力が未熟であり、保護者が目を離した隙に様々な事故が発生しています。また、高齢者の事故は重症化しやすい傾向にあります。

ピックアップ

【ピックアップ1】

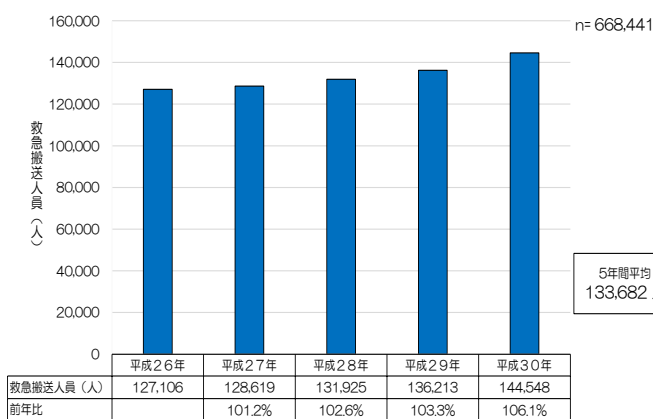
- 「指等を切断する事故」 毎年、約250人が指等を切断する事故により救急搬送されています。12歳未満の子どもが手動ドアの開口部により受傷する事故が多く発生しています。
- 「乳幼児の窒息や誤飲の事故」 毎年1,000人を超える乳幼児が、窒息や誤飲により救急搬送されています。入院が必要になる場合があるので注意が必要です。

【ピックアップ2】

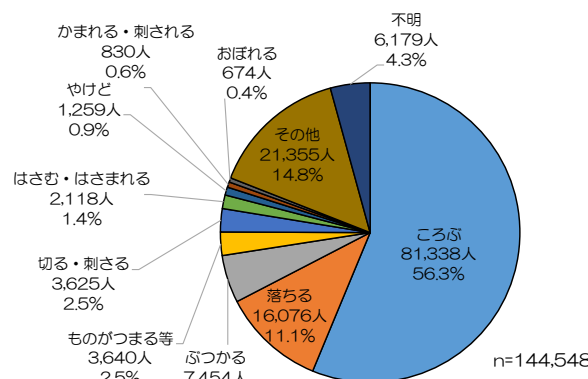
- 「熱中症による救急搬送」 熱中症は毎年6月から9月にかけて多く発生しており、重症化するケースもあります。高齢者が全体の約半数を占めています。

【第一部】平成30年の概要

平成30年中は日常生活における事故により144,548人が救急搬送されています。前年比で8,335人(6.1%)増加し、年々増加傾向にあります。事故種別ごとでは「ころぶ」事故による救急搬送が最も多く、全体の半数以上を占めています。



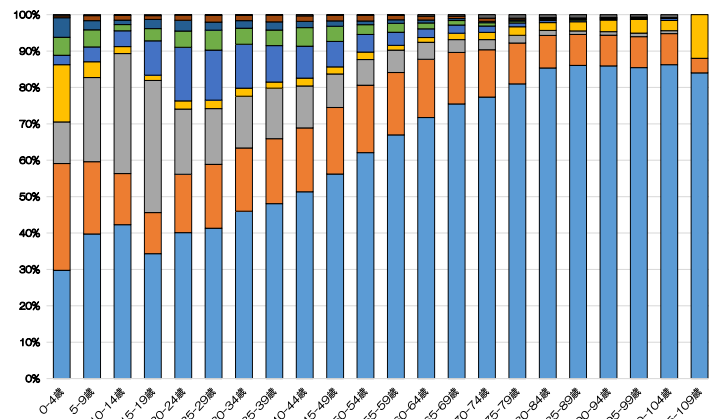
5年間の日常生活事故による救急搬送人員



事故種別ごとの救急搬送人員

【第二部】種別ごとにみる事故

日常生活における事故を種別ごとに分析すると、年齢層によって特徴があります。「ころぶ」事故は年齢層が上がるにつれて多くなり、「ものがつまる等」の事故は乳幼児で多くの割合を占めています。また、「ぶつかる」事故は10代で多くの割合を占めています。



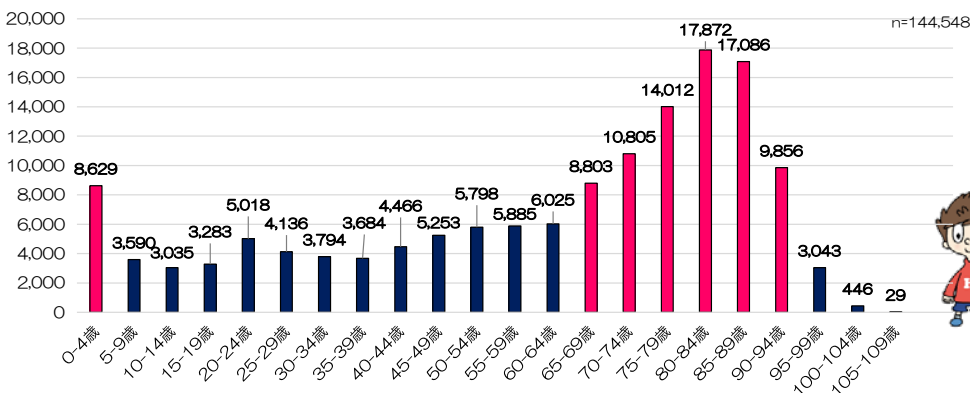
年齢層別の事故の種類別構成割合(その他、不明を除く)

その他にも、エレベーター、遊具の事故なども取り上げています。



【第三部】年齢からみた事故

日常生活における事故を年齢ごとにみると、65歳以上の高齢者が半数以上(約57%)を占めています。また、若い世代では乳幼児が多く、0歳から4歳は8,629人が救急搬送されています。

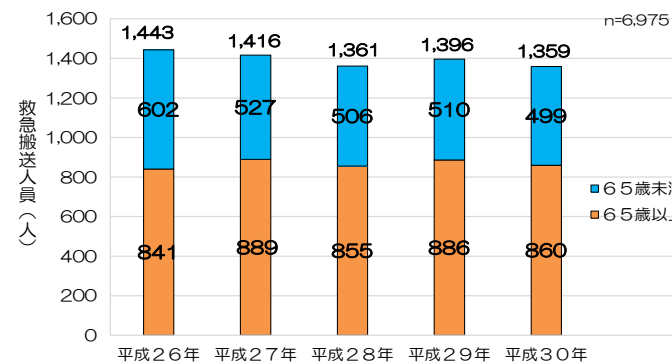


年齢層別の救急搬送人員

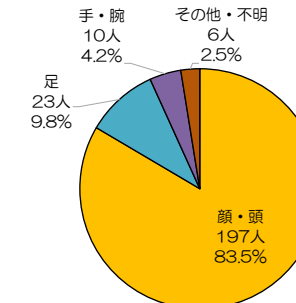


【第四部】関連器物からみた事故

関連器物ごとの事故の特徴を紹介しています。エスカレーターの事故では、毎年1,300人以上が救急搬送されています。また、自転車の幼児用座席に起因する事故では、顔・頭を受傷する事故が多く発生しています。



エスカレーターの事故による年別救急搬送人員



自転車の幼児用座席の事故の受傷部位別救急搬送人員

